

KEYAK!

6月号

先日、近隣の小学校の運動会に行ってきました。卒園した一年生たちに声をかけると、おーっ、と久しぶりの笑顔を見せる子照れてしまう子いろいろでしたが皆元気そうで何よりでした。4月からの短い間でこんなにも次々とプログラムをこなしていくなんて、外見はさほど変わっていないのに着実に自分の歩みを進めているのだなと感じうれしくなりました。

園では年長のスケルトンさつま苗がこちらも着実に根を伸ばしているところです。意外と根を伸ばすスピードが速いのが分かりました。あとは観察できるところにさつま芋が出来てくれると最高なのですが。はだしが丘では中少さんたちが駆けずりまわっております。本当のところは、先生や仲間を追いかけて遊ぶというより、はだしで草の上に立つ感触や青空の下に寝転がってみる感覚や空の青さや高さ、横切る鳥たちやヒコーキ、てんとう虫のゆくえや太陽のあたたかさ。じっと足元を見つめ生えている植物の形や違いに気付いたり、触ってみたりちぎってみたりして何かを「感じる」、自然に「出会う」時間と空間になったら彼らの感性はもっともっと豊かなものになるでしょう。そこに植物の名前だとか知識や教養が入り込む必要はないような気がします。それよりも前にまず豊かな感性を育むことが幼児期という今、大切にしたいことだと思います。

だからと言って駆けずり回ってはいけないとは言っていません。彼らは「無邪気」なだけなのです。無邪気からは好奇心が生まれます。これがのちの興味関心となって、調べてみたり動いてみたりしてその分野に精通していくのでしょう。これがすなわち勉強になるわけで、例えばセミが7年も幼虫で土の中で暮らし、地上に出てきたと思ったら1～2週間で命が終わってしまう・・・なんて頭でっかちが先にきてしまったら虫取りなんて到底できません。

子どもは好奇心のかたまりみたいなもんです。やってみたらどうなるか！大人の予測や見通しは時として子どもたちの「芽」を遮断してしまう場合もあります。

あるあるでいえば、子どもたちは歩いていると何かを見つけ急に立ち止まったりしゃがみ込んだりして大人に「ほら早く！」とせかされます。子どものほうが地面に近いので道端のものが目に留まりやすく、発見しやすく興味が惹かれるのでしょう。以前、安全管理の講習を受けたとき、子どもの視界（視野）が大人と比べどのくらい狭いか、子どもの目線の高さはこのくらいなのでこうゆう場所に注意しましょう、といった勉強をしましたが、逆にこの独特の視界が子どもたちの世界（感性）を生んでいると考えたら、こんなところで立ち止まらないで素通りしようとする大人って、不思議！って思っていることでしょう。まあ不思議は素敵なのでいいでしょう。もしよろしければ、たまに付き合ってください。その子の感性受信中心！なのかもしれませんよ。決して損はいたしません、とは言えません。というわけで、時には「下を向いて歩こう！」のススメでした。人生は上向きで。

3歳

- ・園での生活のしかたや流れがわかり、できることは自分でやろうとする
気持が見られる。
- ・保育者に親しみ、自分の要求や気持を表す。(ぼくも！わたしも！)
- ・道具や遊びを媒介にしながら仲間の存在を知る。

4歳

- ・集団生活への抵抗がほぼなくなる。
- ・クラスの大部分の子どもを知っている。(名前やマーク、どんな遊びをしている)
- ・グループ単位の中で自由に会話ができる。

5歳

- ・集団の一員としての意識を持って行動できる。
(その中で自分が何をすることがわかっている)
- ・互いの力量、よさなどが認め合える。
- ・どんなメンバーの中でも自分の要求が言える。